



木版画 安藤修一

～ 季節 だより ～

奥多摩の花100選「秋の花」

植物の世界では、秋に咲く樹木の花は意外と少ないようです。万葉人が歌に詠んだナンバーワンのハギ(萩)は選外でした。草本類で秋の花といえば、キク科を中心に多くの花を見ることができます。花の色は、黄色と青紫色系が印象的ですが、今回100選入りした花のうち、アキノキリンソウ、キバナアキギリ、セキヤノアキチョウジの3種類は、名前に秋の文字が入っています。そのうち、セキヤノアキチョウジは、漢字で「関屋の秋丁子」。関屋は、源氏物語54帖の一つ。私たちが知っているのは、桐壺とか空蝉ですが、関屋の巻では、光源氏が逢坂の関で空蝉と行き違い、往時を偲びます。そんなところに青紫色で可憐なセキヤノアキチョウジの花が咲いていたら演出効果満点です。命名者がセキヤノアキチョウジという名前をつけた経緯を知りたくなりました。

植物の命名もいろいろ。文学的素養満点の人がいるかと思えば、オッタチカタバミとか、ペラペラヨメナなど、センスを疑いたくなる名前もあります。

奥多摩むかし道を歩いて目にとまるのは、白い清楚な花のリウノウギク。龍の脳の香りをイメージして牧野富太郎博士が命名したそうです。花よりも草全体に良い香りがあります。

アワコガネギクは、粟の黄色だけでは、物足りず黄金色まで付け足したほど鮮やかな黄色。紅葉のむかし道散歩でこの二つのキクを見つけ、香りと花の色を堪能してみたいはいかがでしょうか。

アザミのような花のオヤマボクチは、奥多摩でネネンボウの名で親しまれている草餅の材料です。葉裏に密生した白毛が餅のつなぎになります。

晩秋の花といえば、リンドウ。深い青色が秋色の草むらに美しい。同じリンドウの仲間でもツルリンドウは、地味な夏の花のためか選外でしたが、真っ赤な実が初冬まで楽しめます。

標高差がある奥多摩では、8月から咲き始めるヤマドリカブト、ツリフネソウ、サラシナショウマ、シラネセンキュウ、ツリガネニンジン、ソバナ、ツルニンジン、は、秋の花に入れることにしました。

(岡崎 学)

～ 赤 さ っ せ ん ～

奥多摩山里歩き

～大丹波・川井を訪ねる～

コース:川井駅～大丹波～川井～御嶽駅

開催日:12月19日(木)

平成 21 年に「奥多摩・山里歩き絵図」が発行されました。奥多摩町内を 21 の集落に区切り、歴史・文化・伝統・史跡・寺院・地蔵や各集落の見どころ等が紹介されています。まさに「21 世紀の宝さがし」の気持ちで歩きませんか。

今回はその中の、大丹波と川井の見どころをたずねます。

まず、川井駅から大丹波川の左岸の林道を歩き大丹波の集落に入ります。40 分程で最初の見どころの薬師堂に着きます。ここには薬師如来、十二神将像が安置され、地元の人々に深く信仰されています。

薬師堂を後に、春にはミツバツツジ等多くの花が咲く道を歩き、白髭神社・青木神社を経て輪光院に向かいます。入口には、義民の碑があります。これは江戸時代、増税・減免の箱訴を敢行して入牢獄死した犠牲者の供養碑です。八代将軍吉宗の時代に出

来た目安箱は、知識としては知っているところですが、この深い山里にもそのような事件があったとは、あらためて驚かされます。そして増税は、昔も今も変わらぬという思いを実感します。

足に自信のある方は、輪光院の上にあるツガの巨樹を見ると良いでしょう。ツガのある所からは大丹波の集落が見渡せ展望の良い所です。

夏には、家族連れ釣りの客でにぎわう大丹波国際ます釣場を見ながら車道を歩く事 30 分程で川井集落に入ります。川井では、天照山蟠龍院を見たのち八雲神社へと向かいます。

八雲神社は、東京都有形民俗文化財に指定されており、石段をまたぐように建てられた舞台は珍しい造りとなっています。

川井駅から御岳方面に行きます。線路をくぐった所にある神塚(かづか)の五輪塔は、足利期のものと思われる古いものです。

せせらぎの里美術館から、多摩川沿いを御岳まで歩くと 1 日楽しめるでしょう。(清水隆芳)

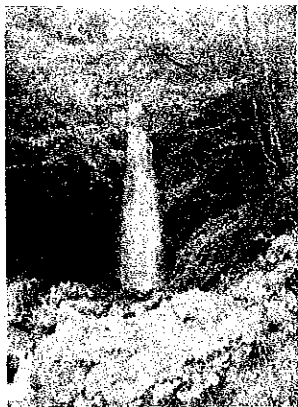
～ 行 っ て 赤 た ゃ ん ～

『百尋ノ滝』(日本水源の森百選)

まずは日原行きのバスを利用して川乗橋で下車、林道を歩くこと約 45 分で細倉橋に着く。橋の袂にある新設の小水力発電システムとパイオイレの間から川苔谷沿いの登山道は始まる。

この道に入って最初の橋の下に現れる直滝が北ノ沢魚止ノ滝(約 10m)である。登山道はこの滝の上に架かる小橋を渡って左岸を進む。やがて樋のように削られた水路を豪快な姿で流れ落ちている長滝(約 20m)を見る。この滝の登山道寄りには、樋の上部が土砂によって埋ったもう一本の平行した空滝が寄り添っており、自然の威力を感じる。

三筋の滝(3m)で登山道は右岸に移り小休止に適した平坦地に出る。滑に架かる小橋を再び左岸に渡り暫く進むと、右手の支流にはその名の通りほっそりとした



ウスバノ細滝も見られる。さらに登山道は右岸に移り、高度を稼ぎながら滝見尾根を巻いて進む。火打石谷との合流点先で仮設橋を左岸に渡る。登山道は本流から離れて急峻な岩場を登り川苔山への指導標のある棚に出る。

梢越しに目当ての百尋ノ滝(約 40m)を望めるが、慎重に階段を降りて滝の傍から眺めたい。奥多摩の紅葉は 10 月初旬に雲取山からはじまり、駆け足で里へ降りてくる。この名瀑(水源の森百選)を、できれば紅葉との共演で堪能したい。小橋の下りは危険を伴うので滝見尾根に戻って林道を帰る。

注 … 昨年新設の小橋を含めこの道は滑り易く危険箇所も多い。単独は避け経験者と同行されたい。なお谷の遊行には「奥多摩の山と谷」(山と溪谷社刊)などを参照されたい。(富士光男)

～ 奥多摩「山岳救助隊日誌」抄 その21 ～

「はぐれ遭難の狩倉山」

パーティの分離、分裂は遭難事故の大きな原因のひとつである。一昨年の7月、北海道のトムラウシ山で起きたガイド登山で、8人が低体温症で死亡するという悲惨な事故も、パーティの分裂が大きな原因のひとつであった。

奥多摩石尾根の六ッ石山の東に狩倉山という小さなピークがある。石尾根登山道は通常そのピークを通らず、南側を巻いて六ッ石山分岐に出るのだが、防火帯がその山頂を通っているので防火帯沿いに狩倉山に登る人も多い。

7月3日(日)午後5時40分ころ、日帰りで鷹ノ巣山に登った3人パーティのうち、ひとりが行方不明になったと救助要請が入った。

午前9時ころ奥多摩駅から鷹ノ巣山を目指した、定時制高校時代の仲間 Mさん(48歳)、Tさん(38歳)、Iさん(35歳)いずれも男性の3人は、石尾根縦走路を登って行った。年に何度か一緒に山を登ったり、マラソンに挑戦したりする仲間が軽装備であった。三ノ木戸山を越えて狩倉山下の防火帯あたりで、少し離れて先頭を歩いていたTさんの姿が見えなくなった。少し霧も出ていたことから、他のふたりは急いで後を追いつき、巻き道に入って六ッ石山分岐まで来たがTさんの姿はなくケータイも繋がらず、狩倉山まで防火帯を戻って探したが発見できなかった。ふたりは二手に分かれ、Iさんは六ッ石山から水根に、Mさんは鷹ノ巣山から稲村岩尾根を日原に探しながら下ることにした。

午後2時ころ、稲村岩尾根を下っていたMさんのケータイにTさんからの留守電が入っているのに気が付いた。電波状態が悪く途切れ途切れではあるが「道に迷って転落し、ケガをして動けない、助けてくれ」というものであった。居場所は全く分からず「ふたりが見えなくなった所から30分ほどして転落した」とのことだった。その後Tさんのケータイは繋がらず、MさんはIさんに連絡して再び狩倉山に登り返し、見失った付近をTさんの名前を呼びながら探したが発見できなかった。

110番通報が入ったのは午後5時40分、捜索しているふたりから依頼を受けた下山中の登山者が、ケータイが繋がる場所に来て通報したものであった。日没も近いことから、とりあえず高田副隊長、襦袢隊員が三ノ木戸から石尾根を六ッ石山まで、佐藤隊員が水根からトオノクボ経由で六ッ石山までの一般登山道で捜索

に入った。Mさん等にケータイで状況を聞きながらの捜索であったが、どちらもめぼしい発見はなく、六ッ石山で合流した3名は、ハンノキ尾根を境に下山し、午後10時50分捜索を打ち切った。奥多摩消防署山岳救助隊も石尾根を中心として捜索したが、何の情報もないという。

翌4日、12名の隊員が4個班に分かれ、狩倉山、六ッ石山を中心としたパリエーションルートとして登られている尾根や沢、水源林の巡視路などを中心に捜索することにした。昨日Tさんのケータイに架電していた川津隊員のケータイに、今朝方午前6時27分にTさんから着信があり、電波状態は悪かったがTさんは「2～3メートル滑落し、頭にケガをした、今いるところは分からない」その程度の会話をし電話は切れたという。まだ大丈夫だ、今日中に何とかしなければと隊員は意気込んだ。消防はヘリで稜線まで飛び、稜線から下に降りながら捜索することであった。

私は救助隊で一番若い市川隊員と、六ッ石山を源流として南東に流下し、境集落で多摩川に注ぐ小中沢に入り、山菜田が多く見られる中流域を探した。この日は気温が34度と蒸し暑く、熱中症に注意しながら、午後は石尾根稜線を将門馬場まで辿り、タル沢尾根を日原集落まで降りた。要所要所で声を張り上げTさんの名を呼び続けたが返事がなかった。各班も1班、山ノ神尾根～狩倉山～日陰指尾根。2班、水根沢林道～鷹ノ巣山～稲村岩尾根。3班、三ノ木戸～石尾根縦走路～ネズミ指尾根。と探したが、何も手掛かりを得ることができず夕方下山した。消防の山岳救助隊も手掛かりはなく、明日の捜索は一旦見送るが何か手掛かりがあったら連絡をもらえれば出動すると電話があった。

パーティのMさんは、奥多摩の旅館に泊まり込んで捜索の行方を見守っている。明日はMさんにTさんを見失った地点まで一緒に登ってもらい再検証をすることにした。

翌5日、捜索3日目である。昨夜は大雨が降った。食料はなく、Tシャツに短パン、スニーカーと軽装の遭難者は、今日発見されなければ厳しいだろう。捜索隊員は13名、4個班に分かれ未捜索の支尾根、沢を中心に捜索する。私は昨日と同じく市川隊員と組み第3班。小中沢の上流を中心に六ッ石山南側に多くある仕事道に入った。4班の高田副隊長の班に捜索依頼者のM

さんが同行し、遭難者を見失った地点の検証を行う。1班は稜線北側の家入沢～狩倉山～狩倉沢。2班は石尾根縦走路～六ッ石山間の仕事道にそれぞれ入山した。

今日も暑くなった。右岸上部の巡視道を小中沢源頭付近まで登り、石尾根稜線登山道の下部を平行に走る巡視道を探して昼食をとった。午後は六ッ石山からの登山道に平行して仕事道をトオノクボ方向に下る。ハンノキ尾根に合流し、そのままハンノキ尾根を境に下る。イソツネ山付近は草が生い茂って、踏み跡も不明瞭だ。あと20分も下れば境集落に着くというとき、1班から通信指令本部に無線連絡があった。1班は家入沢を登り、狩倉沢を下っている佐藤、禰寝両隊員の班だ。「狩倉沢上部からの呼び掛けに下の方から声が聞えた」というものである。「おっ、いたぞ」私は市川隊員に声を掛けると走るように下りはじめた。ここから登り返しては2時間半は掛かる。下って車で石尾根を回り込み、小菅集落から狩倉沢を登った方が早いかもしれない。次々に佐藤隊員からの報告が通信指令本部に入る。1班は急な枝沢を下って声の主と接触したという。「行方不明者の T さんに間違いありません。頭をケガしており、衰弱しているが意識はあります」「介添えすれば歩行も可能です。50メートル程上に少し開けた所がある、そこまで上げるので、航空隊にヘリを要請願いたい」と、ヘリを要請している。

私と市川隊員は境集落に下山した。交番からの車を待っている間、佐藤隊員と無線通話した。「ヘリでピックアップできそうか、ドウゾ」「何とか大丈夫だと思います、ドウゾ」。ヘリが大丈夫なら1時間もあれば救助可能だろう。まだ午後3時半だ、私達は奥多摩交番から迎えに来た車で、氷川から日原街道に入り大沢釣り場から小菅集落に登り上げた。ここは狩倉沢のちょうど真下である。もしヘリ救助が不可能なら、ここから狩倉沢沿いに登って行けばよい。

高台の伽藍神社の階段を上ると、真正面に狩倉沢全体を見渡すことができた。現場には稜線近くにいた2班も合流し、遭難者を60メートルほど上流に移し、ピックアップできる態勢を整えている。すでに警視庁航空隊のヘリコプター「おおとり8号」が立川の航空隊を離陸してこちらに向かっているという。

15分もするとヘリのローターの音が聞えてきた。狩倉山の相当に高いところを旋回している。ヘリは下の現場と無線交信し、照明弾を発射してくれと言っている。しばらくして狩倉沢上部からピンクの閃光が白い煙の尾を引いて打ち上げられ、放物線を描いて消え

た。しかし煙はしばらく消えないので、私たちも初めて現場の位置を確認することができた。

現場を確認したヘリは、一旦狩倉山の裏に消えたが、しばらくして再飛来し、高高度から旋回しながら高度を落としたが、葉の生い茂った樹木に阻まれ現場を見失ったか、再度照明弾を打ち上げるように無線で依頼した。

しばらくして照明弾が連続して打ち上げられた。ヘリは徐々に高度を落としホバリングに入った。こちらから見ると前の日陰指尾根が邪魔になりヘリの機体が半分ほどしか見えない。ずいぶん長い間ホバリング体勢をとっていた。航空隊員が1名ホイスト降下したものだろう。ヘリの緊張した操縦と、下の現場の緊迫した行動が目に見えるようだ。そして遭難者の担架の吊り上げ、誘導ロープの確保。山岳救助隊と航空隊との絶妙な連携プレー。ヘリが高度を上げた。遭難者を機内に収容したものだろう。徐々に高度を上げ、大きく旋回し機首を下流に向け飛び去った。私と市川隊員は思わず拍手をしていた。現場の佐藤隊員から通信指令本部への報告が入った。「午後4時57分、遭難者を無事おおとり8号に収容し立川災害医療センターに搬送。人員装備異常なし、ドウゾ」。石尾根の北側にこだわって捜索していた佐藤隊員の読みがピタリと当たった救助活動であった。

私と市川隊員は車で奥多摩交番に戻った。車から降りると、遭難者のメンバーMさんが走って来た。交番に待機して、現場の生々しい救助活動の無線を聞いていたものだろう。「ありがとうございます」泣き顔である。「無事でよかったね。すぐ病院に行ってやったほうがいい」と答えると、「ありがとうございます」と泣きながらMさんは駅に走って行った。

それから3時間ほどして救助隊員は全員下山し、3日にわたった救助活動は終わった。ろくな休憩もとらずに道のない急傾斜を探し回り、疲労もピークに達しているはずなのに、隊員の顔はみんな明るく会話も弾んでいる。やはり遭難救助は、生きて救助することが一番だ。

仕事道に迷い込んだTさんは助かったが、それから1ヶ月も入院するハメになる。

山昏る 蒼き息吐くかりんどう

(青梅警察署囑託員 山岳指導員 金 邦夫)

奥多摩昔語り

奥多摩の地名(23)

川野(かわの)は、町内で一番小字が多く、白丸の7か所に比べ75か所あります。川野とは、川沿いに広がっている地形のことで、小河内では、河内の次に人家の多い地域でした。戦国時代末期の頃、小河内には、平時は農作業や山仕事で生計をたて、いざという時には、武器を取って戦う小河内衆という土着集団があり、これを束ねていたのが、川野の杉田氏でした。杉田氏は、三田谷(みたやつ)と呼ばれた多摩川筋を治めていた青梅勝沼の三田氏の代からその後の後北条氏の時代も、川野に居を構え、甲州、武州の境目の守備についていました。

その頃の話です。小河内衆の頭領・杉田入道重長の館につねという眉目よき女中がいました。館の後側には、杉田氏の香華寺浄光院という寺があり、香蘭という修行僧がいました。この香蘭とつねとは、いつしか恋をささやく仲になり、これを知った住職は、本山

から預かった修行僧の行く末を案じ、甲州郡内領西原村の宝珠庵へ移籍してしまいました。つねは、恋しい香蘭に会いたさのあまり、寝静まった館を抜け出すと、険しい山道を辿って西原村まで行き、香蘭との逢瀬を果たすと、とって返すように川野村への道を急ぐのでした。三頭山を越えて川野村が見える尾根筋まで来ると東の空は、白んできて、家々から朝餉を炊く煙が立ち昇っています。「ああ、お館様に何とお詫言ひしよう。お地藏様お助け下さい。」涙ながらに路傍の地藏尊に合掌するのでした。いつしか里人は、ここを「おつねの泣き坂」と呼ぶようになりました。三頭山の下方、入小沢の峰の急登が「おつねの泣き坂」と呼ばれる場所です。

奥多摩民謡「つね泣き峠」は、この物語を基にして杉田芳春作詞、三界稔作曲により制作されました。

【資料】奥多摩町誌、広報おくたま

(岡部義重)

奥多摩歳時記

秋の味覚(柿)

山の中に柿の実が枝をしならせて、なっていますが、最近では、誰も柿もぎをする人はいません。喜んでいるのは、熊だけで、木の上に陣取って存分に食しています。

多摩川の源流に近い小河内(奥多摩町内の山梨県境側)では、小河内ダムが竣工する昭和32年間近まで、村を離れ難い人たちが生活していました。生業の主なもの、昔から続いている零細な農業と養蚕の他、木材関係の賃仕事でした。農家には、蜂屋柿の木が5・6本はあり、それらは皆、一抱えもある大木で、百匁柿と呼んでいるように大きな実が鈴なりになりました。蜂屋柿は渋柿なので、干柿にして食用としましたが、柿を木からもぎ取って、皮をむき、縄に吊るして干し上げるまで大変な仕事でした。一人が縄をつけたヌキナシ(めかご)と柿採り竿を持って木に登り、ヌキナシが一杯になると、するすると下の受け手に届けて、空けてもらい、柿が竿の届く所まで移動しながら、ヘタの近くからもぎ取る手間のかかる作業でした。もいだ柿は、家族中が夜なべをして皮をむき軒下に吊るして干し上げました。渋柿は、一度口にしたら

なかなか渋みが取れないものですが、干柿にするのと、甘味の優れた上菓子になりました。

縄に吊るせない柿は、切り干しにしたり、2階にころがして置くと、囲炉裏の煙が回り、表面が真っ黒にすすけてくる頃、皮をむくとちょうど食べ頃の熟柿になっていました。熟柿は、とろりとした独特の甘味があり、麦こがしをまぶして食べたりしました。焼酎で渋みをとる樽柿もありますが、鶴の湯温泉の湯に数日漬けて渋みを抜いて食べました。柿の皮は蓆に広げて干しました。この皮も甘味があって、白菜、沢庵漬けに使用しました。

又、青い蜂屋柿を樽などに入れて漬し、出た渋汁は、和紙に塗ったり、四つ手網などの強度をつけるために使用しました。

明治の頃のはなしです。ある月夜の晩、縁側に干して置いた柿の皮を、狐が食っています。仁兵衛爺さんは、火縄銃を取って2階へ上がると、ねらいを定めてぶっばなしましたが、狐は、逃げうせました。数日後、近所の嫁さんが「この間は、怖かった。あぶなく鉄炮で撃たれるとこだったよ。」と変なことを云っていたといひます。

(岡部義重)

ガイドだより

『雲取山』 ～私の一名山～

私が奥多摩の山で初めて登った山が雲取山であった。学生時代の昭和 37 年秋、奥秩父縦走の手始めとして、恋人と共に三峰口から登り、雲取山を経て笠取山まで歩いた時が最初であった。

その奥秩父縦走は、翌秋には信濃川上から入り、十文字峠から甲武信岳を経て雁坂峠、そして3年目の秋には、真ん中に残っていた笠取山から古礼山を経て雁坂峠を踏破して完遂した。

山小屋宿泊が初体験の私たちは、不安と期待でドキドキしながら雲取小屋に入った。小屋の土間には、特注品と思われる鉄製の大きな四角い薪ストーブがあり、その上では真っ黒いヤカンがしきりに白い湯気を吐いていた。

山小屋泊りだけでなく、自炊も初体験だった私たちは、料理しやすさを考えて、生肉でなくコンビーフの缶詰を用意していた。それを見て、「肉じゃあないの?」と、小屋の管理人であった新井新太郎さんに笑われたことを、なぜか鮮明に覚えている。

最初の登頂の際、山頂から南側の肩に延びて、肩で分かれて、東西に延びる帯状の草原は、単なる自然風景のひとつとして見ていた。その草原が山火事の延焼防止を目的として人為的に作られた無立木地であることを知ったのは、だいぶ後のことであった。

その縦走を試みた時には、雲取山から笠取山にかけての稜線の南側に広がる森林が、3年後からの私の職場となろうとは思ひもなかった。

その後、仕事や趣味で何回も登った雲取山であるが、もっとも印象に残っているのは、北東面に広がるトウヒ、コメツガ、そしてシラビソなどの針葉樹で構成される亜寒帯林である。文献によれば、その針葉樹林にはオオシラビソ(アオモリトドマツ)もあるとか。いつか自身の目でそれを確認したいと願いつつ、まだ果たしていない。

20年ほど前までのその針葉樹林は、下層植生には、しっかりと次世代を担うべき若木がびっしりと生えていて、その森林の安定さをうかがわせていた。

この森林において、今、シカの食害による森林衰退が進行している。一抱えもある太いシラビソなどのモミ類が樹皮の食害により立ち枯れ、次世代を担う筈であったシラビソやコメツガなどの稚樹が、葉を食われて枯れているのである。雲取山を想うとき、一緒に思い出す光景である。
(堀越弘司)

施設案内

『食彩キッチン メイフライ』

美味、しかも値段はリーズナブル。そんな評判をいただいているメニューの数々は、クリスピータイプのピザ、各種パスタ、香ばしく焼いたスペアールプ、カレー等々。

ピザ・マグリータ 900円～

スペアリブライス 1,000円

電話 0428-83-2788

西多摩郡 奥多摩町 日原68

鍾乳洞行か東日原行で大沢バス停車

イベント案内

奥多摩町と観光協会では、初秋から冬に向けてイベントを用意しております。「名人・達人観光ガイドの会」のガイドがご案内します。

希望者は、往復はがきに参加したいイベント名・住所・氏名・年齢・電話番号(2名様まで)を明記の上、奥多摩観光協会へ。(抽選の場合あり)

① 10月28日(金) 紅葉の鹿倉山を訪ねる

応募締切日 10月15日(登山)

② 11月4日(金) 紅葉の奥多摩湖右岸を歩く

(いこいの路 15km)

応募締切日 10月22日(ハイキング)

③ 11月16日(水) 紅葉の倉戸山を訪ねる

応募締切日 10月22日(登山)

④ 11月25日(金) 鳩ノ巣城山登山

応募締切日 11月12日(登山)

⑤ 12月7日(水) 金岱山で冬の樹形を楽しむ

応募締切日 11月25日(登山)

⑥ 12月15日(木) 冬の奥多摩の野鳥を探そう

応募締切日 11月25日(ハイキング)

12月19日から翌年3月まで、山里歩きシリーズを予定しています(イベントカレンダー参照)

募集人員：各回30名 参加費：700円

次号は、平成24年1月15日に発行します。

発行：奥多摩観光協会

住所 〒198-0212 奥多摩町 氷川 210

電話 0428-83-2152 Fax 0428-83-2789

編集：名人・達人観光ガイドの会